

## 素質的胎児疾患および新生児遷延性適応障害患児 の医療と健やかな生活をもとめて

(分担研究：新生児・乳児の在宅療法と生活管理をめぐる保健指導に関する研究)

研究協力者 高橋 滋  
共同研究者 沢田 幸地 高田 昌亮

**要約：**保健指導上問題になると思われる患児がNICU延長線上に存在し、長期入院群は素質的胎児疾患3対遷延性適応障害7の比率で包含し、長期入院でなくとも素質的胎児疾患児が保健指導上問題になることも確かである。

**見出し語：**NICU長期入院児の転帰

**研究方法：**当院NICUに昭和61年1月から3年間に入院した患児913名の内、3カ月以上の長期入院児68名について実態調査を行った。長期入院でなくとも保健指導上問題になる患児もあり昭和60年1月から5年間について概観した。

**結果：**(1)総入院数に対する長期入院児の割合は、6カ月以上1年未満は4名(6%)、1年以上は3名(4%)であった。在胎週数別では32週未満が約70%を占め、出生体重別では1500g未満が66%を占めていた。(2)長期入院児の疾病内訳では素質的胎児疾患が30%、遷延性適応障害が70%を占めていた(表1)。(3)長期入院児68名の転帰を調査した(図1)。合併症を認めた30名のうち、転科は頭蓋内出血・水腎症・腸回転異常の1名、転院は出血後水頭症・気管切開例、奇形症候群例、Arnold-Chiari奇形・気管切開例の3名であり、26名が退院した。

退院後、巨大児の1名が自宅で痙攣のため死亡した。再入院で死亡の2名はダウン症児と超未熟児である。ピエール・ロバン症候群の1名は経管栄養を在宅療法として委ねた。退院後も低酸素性虚血性脳症、頸髄損傷等9名が問題となった。(4)素質的胎児疾患58名の70%が長期入院でなくとも保健指導上問題を有していた。(5)NICUから小児病棟へ転出後に気管切開術を受け在宅療法に委ねた児が4名あり、日常療育で両親が多くの問題を抱えていた。

**考察：**当成績にもみられる如く患児の障害は多岐にわたるため、広い分野の専門家によるチームアプローチと、同時に患児と家族の主體的な取り組みが療育を実りあるものにするために不可欠であり、常に育児に対する意欲をもたせる配慮が求められているものと思われる。

表1

長期入院児の疾病内訳

(昭和61~63年)

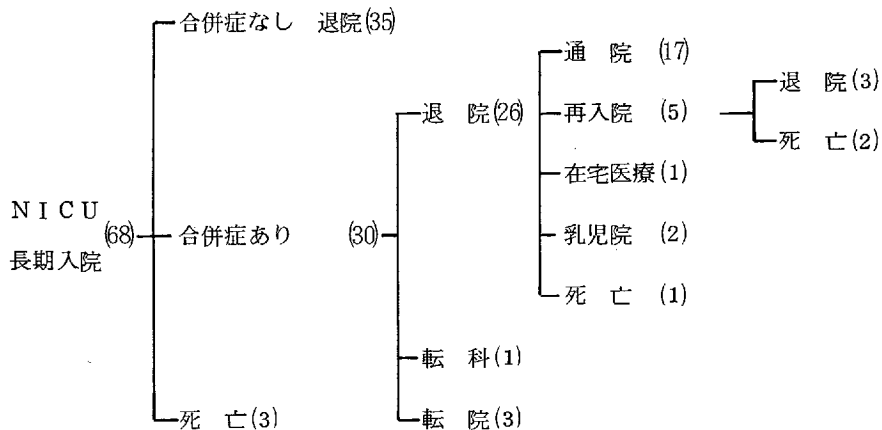
素質的胎児疾患		遷延性適応障害	
先天性心疾患	27(10)	呼吸窮迫症候群	21(2)
動脈管開存	16(2)	気管支肺異形成	9(2)
心室中隔欠損	8(6)	ウィルソン・ミキティ症候群	4(1)
大血管転位	1(1)	低酸素性虚血性脳症	2(2)
心内膜床欠損	1(1)	頭蓋内出血	8(1)
ファロー四徴	1(0)	敗血症	14(3)
ダウン症	6(6)	新生児壊死性腸炎	3(1)
18トリソミー	1(1)	新生児痙攣	1(1)
奇形症候群	1(1)	頸髄損傷	1(1)
ピエール・ロバン症候群	2(2)	肺炎	3(2)
プラダー症候群	1(1)	気胸	3(0)
アーノルド・キアリ奇形	1(1)	難治性下痢症	1(1)
先天性水頭症	1(0)	未熟児網膜症	22(0)
先天性甲状腺機能低下症	1(1)		
臍帯ヘルニア	1(1)		

( )内は出生体重1500g以上の児

日大板橋病院NICU

図1

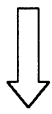
長期入院児の転帰



日大板橋病院



**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:保健指導上問題になると思われる患児がNICU 延長線上に存在し、長期入院群は素質的胎児疾患 3 対遷延性適応障害 7 の比率で包含し、長期入院でなくとも素質的胎児疾患児が保健指導上問題になることも確かである。